日銀支店長が語る

経済よもやま話

第18回 900年と1300年

日本銀行仙台支店長　岡山 和裕

タイトルの「900年と1300年」を見られて、何のことだろうと思われると思うが、これがすぐに分かる方は歴史に興味をお持ちの方だろう。そう、今年は中尊寺金色堂が創建されてから900年、多賀城が創建されてから1300年の、記念すべき年なのだ。それぞれ、中尊寺金色堂は1124年、多賀城は724年に創建されている。

それぞれに関係するところに行ってみた。まず、中尊寺金色堂。ここには何回か行っており、私が愛用している扇子は、中尊寺金色堂で買ったものである。扇子は、夏を乗り切るために必須のアイテムだ。

また、５月上旬に岩手県平泉町で開催される「春の藤原まつり」に行ってみた。このお祭りは「源義経公東下り行列」で有名。源義経が、兄である源頼朝の追討から逃れて平泉に辿り着いた時、藤原秀衡や地元民が温かく迎えたという故事を再現したもので、総勢90名の参加者が平安装束をまとって練り歩く豪華絢爛な時代絵巻である。午前中に、藤原秀衡が出迎える行列が中尊寺を出発し、一行が昼過ぎに毛越寺へ到着するとそこで「義経公ねぎらいの場」が再現される。午後は、源義経も登場して、毛越寺を出発して中尊寺金色堂に向かうのである。

歴史にお詳しい方はご存知だと思うが、中尊寺金色堂を創建した奥州藤原氏は、最終的には源頼朝に、源義経を長らく匿っていたことを理由に滅ぼされてしまうのだが、それまでの約100年の間に京文化を吸収した上で多くの寺院や庭園を築くなど、栄華を極めたのだ。

そして、次は多賀城。多賀城は、平安時代に、陸奥国を治める国府として、さらに、東北地方北部の「蝦夷の地」を国内に取り込んでいく役割を担うために、創建されたと言われている。また、多賀城は「宮城県」の名前の由来の一つらしい。その後、11世紀中頃には国府としての主要な役割を終えたと考えられているとのことだ。

ところで、大和朝廷の勢力拡大のための拠点は多賀城だけでなく、それ以外にも秋田県の払田柵、秋田出羽柵、岩手県の胆沢城、志波城もあるのだ。すなわち、勢力拡大に合わせて北限の拠点を北上させていっているのだ。これらにも行ってみた。

では、なぜ、大和朝廷は東北地方への勢力拡大に力を入れたのか。その疑問は、あるテレビ番組を見て氷解した。すなわち、陸奥国は様々な農産物や鉱物が取れたので、大和朝廷にとって是非とも勢力範囲に置きたかったということだった。全国の中でどの国の国司をしたいかという質問に対して、ほとんどの歴史研究家が「陸奥国」と答えていたのには驚いた。そう、東北地方は昔から豊富な資源を持っていて、実り豊かな地域だったのだ。

ところで、中尊寺金色堂ができてから900年、多賀城が創建されてから1300年経ったのが今年だということは、中尊寺金色堂は多賀城よりも後に創建されているということだ。すなわち、大和朝廷の前線基地ができた後に、東北由来の奥州藤原氏が栄華を極めたということになる。

ここに、東北地方の経済力の高さや自らの勢力を確保しようという逞しい生存本能を痛感する。

東北の底力は強いのだ。

岡山 和裕 氏　プロフィール

1969年（昭和44年）生まれ
兵庫県出身。本店15部署のうち８部署を経験したオールラウンダー。東日本大震災では、金融機構局で被災金融機関との連携役を担ったほか、熊本地震では決済機構局業務継続企画課長として現場を指揮。前橋支店長、業務局参事役等を経て、仙台支店長に就任